

リハビリテーションの専門職 言語聴覚士とは

リハビリテーション科 栗原 佳穂

公立世羅中央病院 リハビリテーション科 栗原佳穂と申します。今回はリハビリテーションについての第二弾としてお話ししたいと思います。

医師や看護師、介護職等とチームを組んで働くリハビリテーションの専門職には、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の3職種があります。理学療法士は主に「起き上がる」「立ち上がる」「歩く」といったような基本動作について診ています。作業療法士は主に日常生活動作であるトイレや着替え、食事や入浴などへの介入を行い、さらに家事動作や社会活動までの様々な動作の取得について関わっています。この2つの職種については比較的人数が多いため、どんなことを専門にしているかイメージを持たれている方が多いのではないかと思います。

では、みなさんは今まで「言語聴覚士」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。リハビリテーションにおいて言語聴覚士の役割は理学療法士・作業療法士と同様に重要ですが、3職種の中では最も新しい資格であるため人数が少ないことや、リハビリテーション室で出会うことが少ないためあまり知られていないことが現状です。言語聴覚士はその名の通り「話す」「聞く」ことに関わっており、言葉によるコミュニケーションに難しさを感じている方に専門的に対応しています。例えば、脳卒中の後に①話す・書くといった行為が難しくなる（失語症）、②唇や舌が思うように動かさずはっきり話せなくなる（構音障害）といった症状に対して、コミュニケーションをより良く取っていくための介入を行っています。一方、それだけではなく「食べる」ことについての分野でも言語聴覚士が活躍しており、食事中にむせる・食べ物を噛んだり飲み込んだりするのが難しくなる（嚥下障害）といった症状に対してリハビリテーションを行っています。飲み込みの機能自体がなかなか良くなる方に対しては、食事のやわらかさ・大きさや姿勢を変えることを検討しています。飲み込みが悪いと「ムセ」が出現し、誤って気管に食べ物が入る「誤嚥」を起こすことがあります。誤嚥を繰り返すと誤嚥性肺炎という病気を引き起こします。

当院でも、脳卒中や誤嚥性肺炎の患者さんが嚥下障害や失語症などで困っていることがある場合に、外来や入院にて言語聴覚士が介入しています。例えば飲み込みにくさやムセがある方に対して、検査、飲み込みの訓練・自分でできる訓練の指導、具体的な食事のやわらかさ・大きさ・介助方法の検討、姿勢調整・環境調整などを行っています。

みなさんのご家族で、普段はそうでもないのに食事中に「ゴホン、ゴホン」とムセがある方がおられたら、それはもしかしたら誤嚥のサインかもしれません。また、最近物を飲み込みにくいといった症状はありませんか。そのような場合はまずはかかりつけの先生と相談され、必要に応じて当院へご相談いただければと思います。

オンライン面会を行っています。

予約制となっておりますのでご希望の方は

公立世羅中央病院 ☎0847-22-1127へお問い合わせください。

